

## 営業スキル向上勉強会(#6)

2016年11月7日

書籍タイトル：知らないと損する 経済とおかねの超基本1年生

今回この本を読んだ目的、きっかけ：

社会人としての常識や営業課の一員として見積もりなどを行うにあたって、経済の勉強をし直した方が良いと思ったから。

概要：

著者は38年証券会社で働き、3万人以上のお客様に相談やセミナーを通じてお金のアドバイスをしてきた。また、「経済とおかね」に関する授業をコンテンツ(WEB上でコミュニケーションする手段)の制作から手がけ、そこでは40万人以上に教えてきた。

それだけの実績がある著者が「人生において大きな損をしないために経済の仕組みを正しく知ろう！」を目的に、また、「分かりやすいにもホドがある」をコンセプトに、身近なことを例に挙げながら分かりやすく経済の仕組みについてまとめた書籍。

参考にしたい点、気になる点

### 1. 「恋も就職も買い物も…」

経済の目的はみんながしあわせになること。

そのためには世の中のありとあらゆる限られた資源をいかに有効に使うかということが大切。しかし、“有効に使う”とはどういうことなのだろうか。

経済学では「最適化(特定の条件下で目的とする最良の結果を導き出すこと)」というが、分かりやすく言うと、世の中全体から見てどこにどれくらいお金や労力を投入すれば社会全体にとって一番良いか、を考えること。

では、一体何をすればいいかというと、生活する上で、あるいは人生で何かを決断しなければならぬ時にどれを選べば自分にとって一番いいかを考えればよい。

ただ、何かを選ぶためには基準が必要。基準は人によって違うが、唯一共通するのが、「満足感」が高まるものを選ぶということ。

満足感とは、“金銭的”、“精神的”に何らかの利益を得ることによって高まる。

逆に損をすると満足感は下がる。人間は誰もがこの“損”をすることを異常に嫌う。

その上、心理学上、損をしたときの痛みは得をした時の喜びの2~2.5倍である。

このため、何かを選ぶときに、あまりにも「損をしたくない」という気持ちが強すぎてかえって間違った判断をしてしまい、結果として損をしてしまうということが世の中には多々ある。

こうした「選択を間違えさせる、選択の邪魔をする」ものが世の中にはあふれている。それを意識的に遠ざけるのに必要なのは次の2点。

- ① 経済の基本的な知識を身に付けること
- ② 誰もが陥りがちな心理的な罠にはまらないようにすること

本書は上の2点も踏まえ、心の面からも考えながら、経済を知ることで、どうすれば人生をよい方向に導いていけるかについてもまとめられている。

## 2. 「貯蓄に励むと貧乏になる!?!」

～高橋是清、日本のケインズ～

高橋是清は明治から昭和の初めにかけて活躍した政治家で優れた財政家でもあった。彼は、日露戦争における戦費調達のためにロンドンで日本の国債を発行したり、昭和恐慌の脱却に手腕をふるったりと、日本の金融界においては非常に重要な役割を果たした。特筆すべきことに、彼は1931年に日本の経済が深刻な不況に陥った時に、それを脱却すべく積極的な財政政策をとったことだ。大量の国債を発行して公共事業や軍事へ投資することで経済を活性化しようとした。その方法は、大量の国債を日銀に引き受けさせることで財政規模を拡大するというもので、これによって市場にマネーが供給され、インフレが発生して大不況を脱する原動力になった。

マイルドなインフレを発生させることで、デフレの悪循環による物価・賃金下落や雇用の減少を止めた彼の政策を「**リフレーション政策**」(リフレ)という。

～自分にとって良いことでも、世の中のためにはならない～

高橋是清の政策を象徴するような解説がある。それは以下である。

「例えば年間の生活費が、500万円で暮らしている人がいる。この人が節約して生活費を300万円とし、残りの200万円を貯金すれば、それはその人にとってはいいかもしれないが、国全体の経済で見ると、その人が今まで使っていた200万円は消費の需要が減ることになるので生産力は低下する。したがって500万円の生活が出来る余裕のある人には500万円で生活してもらった方が良い。」

これは、経済学で「**合成の誤謬**」という。

たとえば、農家の人が生懸命作物を育ててたくさん収穫しようと努力する。これは収穫が増えると収入も増えると考えて行うわけで、それ自体、農家がやっていることは正しい行動。ところが、すべての農家がそのような行動をとると、生産過剰となり価格が下がる。結果として農家の方の収入も減少してしまうということが起こる。

「経済学の目的は、みんなのしあわせ」で、一人ひとりが自分の利益が最も大きくな

るよう行動する、というお話をしたが経済においてはみんなが自分の利益を追求しても必ずしもすべて良い結果になるわけではない。

これは古典的な経済学でいうところの“見えざる手”が常に正しく導くとは限らないので、ある程度政府が介入することも必要だという考え方。

最後に、高橋是清はこうも言っている。

「たとえば、ある人がお茶屋に出かけて行って芸妓さん呼んで遊んだり、ぜいたくな料理を食べたりして10万円使ったとする。

ここで使われたお金はどのように回っていくかと言えば、食べた料理の代金は料理人の給料となり、料理に使われた食材の代金や運搬費あるいはそれを取り扱った業者の収入になる。さらには生産した農業者や漁業者の収入にもつながり、そのお金はさらにその人たちの生活費として使われることになる。芸妓さんに渡ったお金は彼女の食費や着物代、化粧品代となる。

もし、この人がお茶屋に行くのをやめて10万円を貯金したとしてもその効果は10万円にしかない。ところがこうやってお茶屋で使ったお金は転々として様々な人たちの懐を潤すことになり、十倍、二十倍の効果をもたらす。したがって国全体からすればこういう使い方をしてくれた方が好ましいといえるわけである。」

これは経済学の用語でいえば、「乗数効果」ということをあらわしている。

支出や投資を増やすことで、経済全体にはその何倍もの効果をもたらすこととなり、国民所得が増えるということを意味する。

### 3. 「なぜ税金を払うのか」

～水道から水が出てくる、これっていったい誰がやっているの？～

普段何気なく生活している中であまり気にしていないことがたくさんある。たとえば、蛇口をひねるといつでも水が出てくる。一定の年齢になればだれもが小学校に行く。自分たちの住んでいる街に犯罪が起こらないように警官がパトロールしている。これらのことをやっているのは、国であったり、自分が住んでいる市町村であったりすることが主だ。さらにその費用は自分たち自身が支払っている。その費用が税金だ。

～税金は生協と同じ～

人間が生活をしていく上で安全を確保し、便利で快適な生活を送れるようにするには、個々人でやるよりもみんなですこずつお金を出し合って共同で負担したほうが良いことがたくさんあるため、税金という仕組みで賄われている。

全国の生活協同組合みたいなもので、一人一人の単位は小さいけれどまとまって大きくなることで、より質の高いサービスを効率よく受けられるようにする仕組みが

「税」であり、その税金を国家で管理する仕組みが「財政」である。

～“取られる日本”、“支払うアメリカ”～

取られた」とか「とられる」というが、これはお上が主体となって、我々“民”から吸い上げるイメージがある。ところがアメリカの場合、税金は「取られる」という感覚ではなく、「支払う」という意識が強いようだ。

アメリカ人が良く言うのは“**As a tax payer**”という言葉だ。「納税者として」あるいは「税金を払うものとして」という意味だ。つまり、国民の義務としてこれだけの税金を払っているのだから、当然権利として意見も言うし、その税金の使い途についてもきちんと開示することを要求するということだ。

これは考えてみれば当たり前のことだ。近代国家というのは主権在民であるから、税金を払うという義務を遂行するのは当然であるとしてもどうやって使うのかに注文を付ける権利も当然あるはずだ。

にもかかわらず、なぜ日本人はそういう意識にならないのか。本書では、税金というものを自分で意識するにはどうすればいいか、そして実は税金の使い方を自分で指定することが出来る制度があることについて紹介されている。

## 感想

今回、冒頭の目的でも述べたように営業業務に携わるに当たり、経済について高校の復習と社会人としての常識ではあるがまだ知らないことを勉強するために本書を読んだが期待通りだった。何の予備知識(高校レベルの知識はある)が無くても理解できるように書かれていて非常に読みやすかった。

特に税金の項目に関しては、税金をあまりイメージ出来なかった高校生の時とは違う意識と視点で読むことが出来た。これからお金を使うときに「このお金を使うことによって何がどのように動いてどの人たちまでつながるのか」ということも意識しながら使っていきたい。